③
次に、ハコネサンショウウオの一生について説明します。
4月から8月ごろに産卵します。そして、産卵から1、2年で赤ちゃんになります。子どものことを「幼生」と言います。2、3年かかって、大人になります。変態した大人を「成体」と言います。幼生以外は人目に付きにくく、ほとんど知られていません。なぞの生き物なのです。

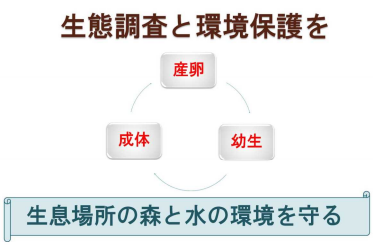
④
5月31日、私たちは、中谷さんに案内していただいて、サンショウウオを探しに行きました。大きい石や小さい石をそおっと上げて、サンショウウオに気付かれないように探します。みんな一生懸命でしたが、なかなか見つかりません。
探し始めて35分ほどたった時、中谷さんが1匹つかまえてくれました。「おおっ」と、みんなが歓声をあげました。
それから30分ほどして、中谷さんがもう1匹つかまえてくれました。

⑤
これが、つかまえたハコネサンショウウオです。大きさは、黒っぽい方が6．7cm、茶色っぽい方が5．8cmでした。成体は15cmくらいですので、この2匹は幼生です。
さわるとヌルヌルしていました。初めて見た感想は、とてもかわいいという人と、ちょっと気持ち悪いという人がいました。

⑥
ハコネサンショウウオの顔をアップで撮りました。かわいい顔をしているでしょう。
足を見ると、黒いつめがはえているのが分かります。このつめは、子どもの時と、卵をうむ時にだけはえるそうです。

⑦
中谷さんから、「ハゼコイさん」のことを教えていただきました。
ハコネサンショウウオのいるハデコイ谷から、薬師寺というお寺が見えます。このお寺に参って、サンショウウオを生で飲むと、食道がんに効くという言い伝えがあるそうです。ハデコイ谷にいるので、ハゼコイさんになったのでしょう。「カク薬師のハゼコイさん」と言って、遠くからお参りする人もいたそうです。中谷さんも若いころ、お参りした人に渡すサンショウウオをとりに行く当番をしたと言っておられました。私は、生では気持ちが悪くて飲めないと思います。

⑧
資料はありませんが、昔に比べると、サンショウウオの数が減っているようです。
ハコネサンショウウオには肺がありません。ですから、卵から成体までの一生を、幼生が見つかった近くの水辺で生活していると考えられます。
ハコネサンショウウオを保護するためには、まずきちんと調査して、どんな生活をしているのか知らなくてはなりません。そして、ハコネサンショウウオが生きている森と水の環境全体を守っていくことが大事だと思います。



6　映画「雨たんもれや」

(1) 映画をつくる

吐山小学校では、10 数年来、地域の方から太鼓踊りを教えていただいている。ただそれは、太鼓の叩き方のいくつかを覚えるというレベルのことである。それで太鼓踊りを識ったことになるのだろうか。

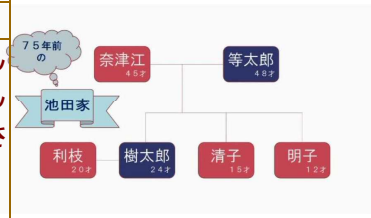
私は若い頃、地域を遠ざけつつ生きてきた。正直、田舎付き合いが苦手だった。地域を大した違和感なく受け容れられるようになったのは、不惑を迎えた頃だ。したがって、太鼓踊りの伝承にも決して熱心ではなかった。そんな私が、古老の話を聞き、地域に残る記録に触れた時、何とも言えぬ故郷への愛おしさを覚えた。――太鼓踊りに込めた先人たちの「こころ」を“カタチ”にしたい。それが映画づくりの出発点である。

１学期の終わりに配役を決め、夏休みに脚本を書いた。タイトルは、「雨たんもれや」とした。雨乞いのダケノボリの際、岳山の上で男たちが連呼した「雨を降らせてください」という意味の言葉だ。

(2) 脚本「雨たんもれや」

0. オープニング

FO	この映画は、昭和10年の雨乞いの記録と、昭和22年の太鼓踊りの記録をもとに、創作したものである。
FI	利枝が教室に入ってくる。拍手で迎える。
利枝	みなさん、こんにちは。
5年生	こんにちは。
利枝	おばあちゃんの名前は、池田利枝と言います。今年で、95才になりました。 今日は、私が二十歳の時の、雨乞いのことをお話しさせてもらいます。
利枝	今から75年前、昭和10年のことやった。その年の3月に、池田のうちへお嫁に来て、それから間もなくのことや。
利枝	そうそう。まずは、そのころの、池田家のことを紹介しとこうかな。
FI	画像　家族図
ナレ01	夫の樹太郎さんは、4つちがいの24。お父さんの等太郎さんは48で、垣内の組頭をしてはった。働き者の奈津江お母さんは、45になってはった。樹太郎さんには妹が2人いて、清子さんが15で、明子さんが12やった。 もう、みんなのうなってしもうて、私しか残ってへんけどなあ。
FI 利枝	教室 さあ、そしたら始めましょな。



1. 日照り

樹太郎	利枝ぇ、利枝。
利枝	はぁい、なんですか？

樹太郎	お前、うちへ来てから、毎日、日記つけてたな。ちょっと持ってきてんか。
利枝	はい、持ってきましたけど、どないしましたん。
樹太郎	今日は、6月10日や。3日前の7日に最初の雨乞い祈願があって、宮さんの境内に砂持ちしたやろ。今日が2回目の祈願で、おやじが宮さんへ行っとるとこや。一体、いつから雨降っとらんのか思てな。
利枝	春田ができてからやったら、5月の18日にちょっと降ってからは、28日と29日がおしめり程度、6月に入ってからも3日と4日に小雨があって、それっきりです。田植えできるような雨は、1日もありませんわ。
樹太郎	もう、1月も降っとらんのか。 去年も一昨年もえらい日照りで、雨乞い祈願があったんやけど、今年はまた特別にひどいな。こんだけ天気が続いたら、もうそろそろ降りそうなもんやけどな。
利枝	はよう田植え済まして、安心させてほしいわ。
FI 明子	池田家 お姉ちゃん、学校の宿題で、「ういろう売り」っていうの覚えてんねけど、ちょっと聞いてくれる。
清子	ちょっとだけやで。聞いたるから、それ貸し。 ふうーん、あんたとこの先生、また、おかしな宿題出してからに…。はい、いいよ。
明子	拙者親方と申すは、お立ち合いの中に、…円齋と名のりまする。 元朝より大晦日まで、(ここで「ただいま」)お手に入れまする此の薬は、昔、(清子の声で間違う)陳の国の外郎
等太郎	ただいま。帰ったで。
清子	あっ、お父ちゃん、お帰り。
明子	うーん、もう。途中でしゃべるから、まちごうたやん。
等太郎	どうしたんや。明子、勉強中やったんか。
清子	いいねいいね、お父ちゃん、どこへ行ってたん？
等太郎	おお、今日は、2回目の雨乞い祈願で、下部神社へ行ってたんや。こうも日照りが続くと、神さんにお願いするしか、どうしようもないわ。
明子	雨がっぱか、番合羽か。貴様のきゃはんも皮脚絆。我等がきゃはんも皮脚絆。しっかわ袴のしっぽころびを、三針はりながにちょと縫うて、…
清子	明子、止め。大事な話してんのに。
明子	うーん。「合羽」言うたら、雨が降ってくるかも知れへんのに。
等太郎	おお、おお。明子、お前も心配してくれてんねんのお。
FI 奈津江	夕焼け 今日も夕焼けですなあ。一体、いつになったら雨が降ることやら。 そうそう、お父さん、明日、どうなりますのやろ。
等太郎	明日って、何が？
奈津江	明日言うたら、6月11日。ほんまなら、どこのうちでも田植え終わってて、大字の毛かけごもりですやろ。
等太郎	おお、そのことか。今日の祈願の折にも話題になってな、いつ

	いうて日は切らんと、田植えが終わるまで延期ってことに決まったんや。樹太郎が今、垣内の人らに言うて回ってくれてるとこや。
奈津江	そうでしたんか。ほんま、夕焼け空がうらめしいですなあ。
FO	夕焼け

2. 千燈明

FI	乾いた田
ナレ21	雨乞いは、3日で日を切って願をかけたんや。3日たっても雨が降らんかったら、願は流れたということで、改めて願かけをしたわけや。
ナレ22	11日、12日ともに天気続きで、13日を迎えた。願は、回を重ねるほど重くなっていき、3回目の祈願では千燈明をすることになったんや。
FI	千燈明
等太郎	今度こそ、雨降ってくれたらええんやが。
尚兵衛	ほんまですなあ。
樹太郎	このままでは、おまんまの食い上げや。
優太	神様、仏様。よろしゅうお願いします。
心一郎	それにしてもや。本来なら、無事に田植え終わらせてもろうて、その報告のこもりの時期やのに、なんちゅう年になってしもたんやろ。
等太郎	まあ、心一郎や。嘆いておっても、雨は降らん。わしらには、こうしてお願いするしか、どうしようもないからなあ。

3. 寄り合い

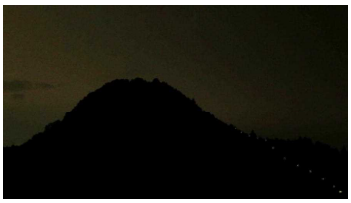
FI	ひび割れた田
ナレ31	千燈明の祈願のかいもなく、14日も、15日も、1つぶの雨も降らんかった。
明子	お父ちゃんとお兄ちゃんは、どこへ行かはったの？
奈津江	一生懸命お願いしとんのに、いっこも雨降らんやろ。寄り合いして、これからどうするか決めるんやって。
清子	なんで、天の神様、言うこと聞いてくれはらへんねやろなあ。
明子	それやったら、私、ええ考えあるで。
清子	なんやの？
明子	てるてる坊主作るやろ。
清子	明子ぉ、てるてる坊主言うたら、ええ天気になってほしい時に作るもんやで。
明子	分かってるよ。続きがあるねん。
利枝	なにやろ。はよ、聞きたいわ。
明子	てるてる坊主を普通につるしたら、ええ天気になるんやろ。そやから、雨が降ってほしい時は、てるてる坊主をさかさまにつるすねん。
清子	なにそれ、けったいなこと考える子やな。だれに似たんやろ、なあ、お母ちゃん。
奈津江	ほんま、おもしろい子やこと。 そやけど、「溺れる者は藁をもつかむ」って言うから、案外効き目あるかもしれへんなあ。
FI	集会所
ナレ32	ちょうどその頃、集会所では男の人らが集まって、相談が始ま

	っていた。
等太郎	今日集まってもろうたんは、他でもない、雨乞いのことや。明日になっても降らんかったら、いよいよ、ダケノボリするしかないかと思うのやけど、みんな、どうやろ。
心一郎	おれは、ダケノボリに賛成です。田んぼはひび割れてくるし、苗代の苗は大きなりすぎるし、とにかく雨もろうて、1日でもはよう植えやんことには。
優太	おれも賛成です。このままやったら、今年は米できやんわ。
樹太郎	おれは、おやじの判断にしたがうわ。
尚兵衛	ちょっと待って。昔から、ダケノボリ、いさみ踊り言うたら、最後の手段やんか。万が一、あかんかったら、もうお願いするすべがないやん。五千燈明か、一万燈明でええのちがうやろか。
優太	そう言われたら、それも道理やな。
樹太郎	優太ぁ。
心一郎	尚兵衛の理屈も分かるけど、みんなのとこ、そんな先の思案するほど、ゆとりあるんか。おれとこやな、田んぼに大きなひび割れできて、一刻を争う状態なんや。
樹太郎	一刻を争う状態やいうのは、心一郎さんとこだけやない。おれとこも一緒や。心一郎さんが言わはるように、先の心配してる場合やないで。
等太郎	尚兵衛も、優太も、どうやろ。
尚兵衛	分かりました。心一郎さんの言われた通りです。うちも、えらいことになってるのは一緒です。ダケノボリ、しましょ。
優太	1日もはよう、田植えしたいのは、うちもおんなじです。ふらふらして、すんません。ダケノボリでお願いします。
等太郎	そしたら、垣内の総意として、ダケノボリを総代さんにお願いするで。 大変な年になってしもうたけど、みんなで助けおうて、乗り切っていこ。よろしゅう、たのむで。

4. ダケノボリ

FI	ひび割れた田
ナレ41	その後も雨は降らず、いよいよダケノボリが行われることになったのや。
FI	池田家
利枝	お母さん、お弁当はこんなもんでよろしいやろか。
奈津江	ええ、ええ。それで十分や。 男の人は山へのぼらはる。私ら女は、こうしてお弁当を作って、山へ持って行ってもらうんや。 山の上と下、祈ってる場所はちごうても、雨降ってほしいという気持ちは1つやねで。
利枝	おにぎりの1つ1つに、私ら女のこころがつまってんのですねえ。
奈津江	清子、明子。お父さんら、行かはるで。
清子	お父さんも、お兄ちゃんも、ようたのんできてな。
明子	お姉さんが作ってくれはった弁当食べて、力いっぱい太鼓たたいてな。
樹太郎	そしたら、行ってきます。

等太郎	行ってくるで。何としても雨もらえるように、がんばってくるで。
利枝	お父さん、樹太郎さん、よろしくお願いします。
FI	城山
等太郎	さあ、まずはしっかり飲んで、食べて、力をためてもらおか。
尚兵衛	ついに、来るとこまで来てしもたなあ。
優太	来てしもたからには、なにがなんでも、降らさねばならぬ。
樹太郎	優太、お前は芝居の見過ぎや。
心一郎	優太の安もんの芝居はともかく、ここまで来たら、ほんま、降ってもらわんとなあ。
優太	このままやったら、苗が枯れてしまうきに、なんとかしとうせ。そうじゃ、わしには、にっぽんを洗濯する力があったがじゃ。
樹太郎	もうええって。この間、坂本龍馬の芝居見てから、どうもお前は芝居かぶれしとるな。
等太郎	いやいや、そういう元気もんがおらんと、雨も呼び寄せられん。優太、しっかり頼むぞ。
心一郎	よっしゃ。そしたら、気合い入れて、雨呼ぼやないか。
5人	オー。
FI	城山　　太鼓　たき火
等太郎	雨たんもれ、たんもれや。
4人	たんもれや。
4人	雨たんもれや。
等太郎	雨たんもれ、たんもれや。
4人	たんもれや。
4人	雨たんもれや。
FI	池田家
明子	お母ちゃん。城山から下ってくる、ちょうちんが見えてるよ。
奈津江	太鼓の音が止んだんで、もうそろそろかなと思てたら、下ってきゃはったんやな。
清子	あっ、清水岳にもちょうちんの列が見えるわ。
利枝	やあ、ほんま。なんか、大仕事を終えたあとって感じやな。
奈津江	こうして明かりを見てると、吐山は一つやって、つくづく思うわ。
ナレ42	ダケノボリには、忘れたらあかん悲しい歴史もあるのや。
ナレ43	今から150年ほど前、江戸時代の終わりごろのことや。 タケノボリを終えて、城山から下りてくる時のこと。そのころは、たいまつの明かりで山を下りていたんやそうや。そのたいまつの火が、近くにある家に飛び火して、屋敷まるごと燃えてしまう事故が起こった。 みんなが一生懸命に雨乞いする中で起こった、つらい歴史やなあ。
ナレ44	そんなことがあってから、長らくダケノボリは途絶えていた。明治の中頃になって、火の用心のために、ちょうちんを使うようになったということや。



5. いさみ踊り

ナレ51	岳山から下りると、7つの垣内の太鼓が、下部神社に集まってくる。そして、一斉に太鼓をたたくのや。これを、いさみ踊りと言うね。うちにおっても、乾いた太鼓の音がよう聞こえてきたで。
	太鼓の音 FO

ナレ52	ダケノボリのあとも雨が降らず、19日には、5回目の祈願と餅まきが行われたのや。みんな、米を1升ずつ出しおうて、それはもう、必死やった。

6. 恵みの雨

FI	雨降り(桜の木) (すべて声だけ)
ナレ61	6月20日の午後、待ちに待った雨がやっと降り始めた。
利枝	あらっ、雨。
利枝	お母さん。雨、降ってきましたよ。
奈津江	利枝さん、ほんまに。
清子	やあ、ほんとに、雨や。
明子	やったあ。やっと、逆さてるてる坊主が効いてきた。
FI	田植えを終えた田
ナレ62	この雨のおかげで、池田の家では、21日と22日の間に、無事、田植えをすませることができたんや。
FI	池田家
等太郎	みんな、ようがんばってくれた。
奈津江	利枝さん、初めての田植えで大変やったやろ。
利枝	ここへ来て、水のありがさたがようわかりましたわ。
樹太郎	ほんま、来て早々に苦労かけるなあ。
利枝	いややわ、樹太郎さん。苦労やなんて。
明子	ほんま、いややわ。熱いなあ、お兄ちゃん。
等太郎	清子も明子も、よう手つどうてくれた。
清子	池田家の子どもとしては当然です、と言いたいところやけど、もう水不足はこりごりやわ。
FI	雨降り(水たまり)
ナレ63	となり近所、おたがいに手伝いをしながら、24日までに、吐山中の田植えが終わり、27日に毛かけごもりということになった。
ナレ64	一旦降り出した雨は、今度はなかなかやまず、24日は、近年まれなほどの大雨になってしもた。 29日になると、ちょっと遠なるけど、京都市で記録的な大雨が降って、鴨川と桂川の橋が大方流されてしまう、えらい被害が出たらしいわ。
FI	神社・毛かけごもり
ナレ65	「毛かけ」いうのは、田んぼに苗を植えることなんやで。無事に田植えが終わったことを氏神さんに報告するのが、毛かけごもりというわけや。いつもの年より16日おくれで、6月27日、やっとこもりの日を迎えることになった。
等太郎	まあ、いろいろあったけど、とにもかくにも、今日の日を迎えることができてよかった。みんな、ご苦労さんでした。乾杯。
4人	乾杯。
心一郎	いやあ、田植えができてほんまによかった。 ところで、等太郎さん。一つ相談なんやけど、こうして願がかのうて雨ももらえたことやし、太鼓踊りを奉納したらどうですやろ。
樹太郎	心一郎さん、そらあええ考えや。わしらのうれしい気持ちを表すには、太鼓踊りが一番や。

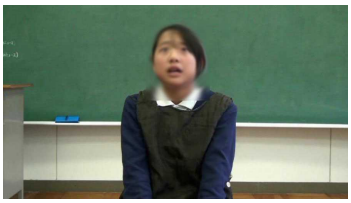
優太	太鼓踊りって、おれ、干田踊りと宝踊りしか知らんけど。
尚兵衛	おれも知らんわ。見たこともないもんなあ。
等太郎	そうやのう。この前言うたら、心一郎がちょっとおぼえてるかないう程度で、優太はまだ生まれてなかったんちがうかなあ。
心一郎	そやから、余計にですわ。こういう機会に若いもんがなろとかんと、だれも踊れんようになると思いますわ。今やったら、等太郎さんもいてくれはるし。
尚兵衛	そうや、若いもんがちゃんとなろとかんとな。
優太	そうと決まったら、さっそく練習や。
等太郎	まあ、待ち。他の垣内の役員さんらとも相談せんと。みんなの気持ちは、しっかりと伝えさせてもらうからな。

7. 太鼓踊り

FI	太鼓踊りの練習
ナレ71	6月30日から、それぞれの垣内で練習が始まったのや。大正2年以来、久しぶりの太鼓踊りで、どうなることやら気をもんだものや。幸いなことに、大正2年にけいこした人が4人残ってはって、その人らが若いもんに教えてくれはったんや。
ナレ72	みんな熱心に、よう練習しゃはって、7月15日には下の垣内の合同練習、16日には上垣内の合同練習があって、すっかり準備がととのうた。
ナレ73	そして迎えた7月18日。その日は、朝の9時に各お寺に集まって、お酒をいただきながら、日照りの苦労話や太鼓の練習の四方山話に花が咲いたそうや。
FI	池田家
明子	お姉さんは太鼓踊り見るの初めてやろ。
清子	そら初めてやわ。うちらかって初めてやもん。
利枝	私ら見るだけなのに、ドキドキしてきたわ。樹太郎さん、大丈夫やろか。
明子	また、お姉さんいうたら。
奈津江	さあさあ、はよ出かけよ。
FI ナレ74	太鼓踊り(秋祭り) 午後2時、7つの太鼓が下部神社へと集まってきた。そのころには、久しぶりの踊りを一目見ようと、大勢の人が境内を埋めてたなあ。
ナレ75	下部での踊りが終わったら、今度は恵比寿神社に場所を移して、みんな終わったのは5時やった。

8. エンディング

FI	教室
利枝	あれから75年。世の中がすっかり変わってしもうたさかい、雨乞いで太鼓をたたくこともうなった。
利枝	私は女やから、太鼓はたたいたことない。そやけど、男の人と同じように日照りの心配をして、弁当を作って男の人をダケノボリに送り出し、祈るような気持ちで太鼓の音を聞いていた女のもんにとっても、太鼓踊りは生活の一部やったんや。
利枝	吐山に田んぼがあり、米作りが続く限り、忘れたらあかんし、絶やしたらあかん、「心」やと思う。
利枝	よう太鼓踊りを伝統芸能や言う人がおるけど、私は、伝統文化



	や思う。
利枝	山あいに田を開き、ため池を造って水を引き、たびたびの日照りとたたかいながら、田を守り、くらしを支えてきゃはった。
利枝	吐山の米作りの一部分として、太鼓踊りがあったのやで。
利枝	太鼓踊りを伝えていくということは、単に踊り方を伝えるんやない。
利枝	吐山の人たちのくらし、もっと言うたら、吐山の「心」を伝えていくことや。そのことを、よう覚えといてや。
利枝	今日は、長い時間、しっかり聞いてくれておおきに。これで、終わりにさせてもらいます。
FO	拍手

(3) 映画撮影こぼれ話

学年つうしん『しろやま』№.51・52(2100.1.21)「おうちの方へ特集号」より

■なぜ雨乞いの映画なのか

…太鼓踊りを識るということは、雨乞いを識ることです。同時にそれは、吐山の農耕文化に触れることでもあります。ーーなぜ雨乞いの映画なのか。映画の最終場面で、老婆が子どもたちに語る言葉の中に、その答えがあります。

■場面設定のあれこれ

昭和 10 年という年代設定は、ある方の日記の記録に依ります。この映画は、昭和 10 年の雨乞いの記録と、昭和 22 年の太鼓踊りの記録を基にした創作です。6 月 10 日から始まる雨乞いの日付は史実のまま、7 月 18 日の太鼓踊りは実際には 12 年後の 9 月 18 日のことでした。

場面描写には、今村さん、向井さん、庄中さんの若い頃のお話を参考にさせていただきました。子どもに昔語りをする「池田利枝」の 95 才という年齢は、今村さんの「現在」と重なります。

現在 95 才の「池田利枝」は、75 年前の昭和 10 年は 20 才です。男映画ゆえ、女子の配役が課題です。苦心の末の「池田家」の誕生です。

○池田利枝(20 才)
○池田樹太郎(24 才)…利枝の夫、春に利枝と結婚したばかり
○池田等太郎(48 才)…樹太郎の父、地区のリーダー
○池田奈津江(45 才)…樹太郎の母、働き者
○池田清子(さやこ)(15 才)…樹太郎の妹、しっかり者
○池田明子(12 才)…樹太郎の妹、ちょっとお転婆

池田家以外の男たちは次のとおり。

○中森心一郎(33 才)…若者のリーダー
○今井尚兵衛(28 才)…慎重な性格
○向井優太(22 才)…愉快で元気者

配役が決まって、大まかな場面設定が固まったのが６月末。シナリオは、夏休みの間に役者たちの顔を思い浮かべて書き上げました。

■撮影秘話（役者編）

配役はすべて本人の希望で決めましたので、役柄と実際とのギャップが生まれます。それを演じきるのが、映画のおもしろさでもあるのですが。

Ｉさんは、セリフを覚えなくてもよいという理由でナレーターになりました。しかし、現実はそう甘くはありませんでした。95 才の声音は低く落ち着いたものでなければなりません。実際のＩさんは、クラス一甲高く元気な声の持ち主です。声作りは、普段の自分を捨てることになります。ＮＧの連発で、相当苦労しました。もうひとつバラしちゃいますが、ラストシーンで子どもたちに語りかける場面があります。きりっと前を見つめて語る名場面ですが、実は、カメラの上の大きなカンペを見ています。

撮影は、10 月 18 日に始まり、太鼓踊りの場面を除いて 11 月４日に終わりました。シナリオを渡してから１ヶ月の練習期間があって、ＮＧ集を作るほどのこともなく撮影できました。１番盛り上がったのは、ダケノボリの場面ですね。ダケノボリは城山ではなく、「いわやま」の奥の方で撮影しました。持参のおにぎり弁当に水酒、スルメも登場。Ｙくんのキャラ全開です。撮影後は、「男子だけずるい。」と怒っていた女子がスルメを奪い取り、宴会をしていました。

■撮影秘話（番外編）

映画のロケは 10 月 18 日からでしたが、場面設定は６月上旬です。映画制作を決めたのが６月上旬で、田植えは１ヶ月も前に終わっています。幸い近くに田植えが遅かった田んぼがあったので、田植え直後のシーンはそこを撮らせてもらいました。ひび割れた田も雨降りも、すべて６月の我が家周辺です。

ダケノボリの焚き火は、夏休みに撮りました。前年の冬に伐採した柿の木を燃やしたついでに撮影しました。使えるものは何でも利用しないと。

利用できなければ、作るしかありません。千燈明のシーンは、特製燭台を自作して下部神社へ出かけました。風が出てきて、ろうそくが消えてしまうし、さんざんでした。ダケノボリの後、城山から下りてくる明かりのシーンも作りました。我が家から見た城山の夜景に、黄色い点をペイントしています。

■「雨除け祈願」の太鼓踊り

太鼓踊りの練習シーンは、11 月 14 日に行われた太鼓踊りクラブの練習を撮影しました。これは体育館でしたから、何ら問題ありませんでした。あとは、11 月 23 日の太鼓踊りを撮影すれば、すべての撮影が終了します。祭りが近付くにつれ、心配事が出てきました。週間天気予報が雨マークになっているのです。太鼓踊りが中止にでもなれば、映画は未完成のまま終わります。雨乞いの映画を作っているのに、太鼓踊りのために「雨除け祈願」をしなければならないという、

実にけったいな、いややっかいなことになりました。ーー雨雲が気を利かせて少し早めに動いてくれたため、こうして映画も完成することができたのでありました。ホッ。

■余話　～創作と現実の間～

映画が始まる昭和 10 年 6 月 10 日は、私の母の誕生日です。雨乞いの記録を見た時から、この偶然には気付いていました。ところが、偶然はそれだけではなかったのです。

配役の年齢構成は、先に書いたように「利枝」の設定を基準にして、池田利枝(20 才)、夫･樹太郎(24 才)、父･等太郎(48 才)、母･奈津江(44 才)としました。最近になって、この年齢構成が現実の「我が家」と酷似していることに気付きました。つまり、

○池田利枝(20 才)……私の祖母(22 才)　前年の昭和 9 年に結婚
○池田樹太郎(24 才)…私の祖父(25 才)
○池田等太郎(48 才)…私の曾祖父(44 才)
○池田奈津江(45 才)…私の曾祖母(44 才)

記録は残っていませんが、私の祖父や曾祖父は、映画の舞台となった昭和 10 年の雨乞いに関わっていたはずです。おにぎりを作ってダケノボリに送り出した「利枝」と「奈津江」は、私の祖母と曾祖母だったかも知れません。そう考えると、「創作」としてのシナリオがとても身近なものに思えてきました。

ところが、私の祖父と曾祖父は昭和 22 年の太鼓踊りには、間違いなく参加していません。曾祖父は、昭和 18 年 7 月に 52 才で病死しました。祖父は、昭和 19 年 6 月に 34 才で戦死しました。太鼓踊りが奉納された昭和 22 年 9 月 18 日、母は 12 才でした。小学校の友だちと下部神社へ行っていたかも知れません。でも、その時の我が家には太鼓をたたく男子はいませんでした。これもまた、歴史の事実です。ーーこの辺の所は、修学旅行に向けての平和学習の中で深めていきたいと思っています。

7　おわりに

ＤＶＤには盤面印刷をし、カラーのインデックスカードを付けた。編集作業と 50 枚のＤＶＤ作成で、正月休みは明け暮れた。

１月 22 日のだれでも参観で上映会を行い、保護者やお世話になった方たちに見ていただいた。子どもたちも初めて自分たちの演技を見た。この日、子どもたちは自分用と近くの人へのプレゼント用に、ＤＶＤを２枚持ち帰った。もちろん、お世話になった方たちにも貰っていただいた。それやこれやで 50 枚は終わった。

予想外の反響が地域から起こった。「ここに住んでいながら知らなかったことが一杯あった。是非多くの人に見て貰いたいので、コピーを作ってくれないか。」